「読 書 空 間」

経営学部　後　　千　代

修士、博士課程の院生時代、名古屋校舎の図書館には大変お世話になった。米国の議会資料や雑誌が豊富で、そのコピーのために何日か続けて書庫に1日中篭っていると、3日目には猛烈な頭痛が襲ってくる。しかもその回復に2，3日かかってしまって困った。

酸素よりも二酸化炭素の方が重いから、きっと書庫の底の方にいると酸欠状態になるに違いないと思っていた。だから続けて2日以上、1日中書庫に篭らないように用心してきた。

子供の頃から山口県宇部市の海沿いで、瀬戸内海からの潮風を吸いながら育ったせいか、空気の悪いところでは身体がすぐに反応してしまう。

書庫に限らず、閲覧室やコンピュータがたくさん置いてあるスペースも含めとても息苦しい。だから階下の閲覧室で黙々と長時間勉強している学生を見ると感心したり、心配したり。

私も集中したい時に、電話などに邪魔されなくてすむ閲覧室を時々利用するが、なかなか長居は難しい。

逆に、ついつい長居してしまうお気に入りの読書空間が今のところ2箇所ある。1つは、数年前から日本でも出てきた、購入する前にコーヒーやお茶をいただきながら読める本屋さんである。出張などで名古屋駅を通る時にはわざわざ時間を調整して寄るお気に入りは名古屋テルミナ地下2階の三省堂だ。7割がた読んでしまっても、結局続きを読みたくて、買って帰ってしまうのだから、時々本が汚れたとしてもお店にとっても良くできたシステムだ。香りと空間が心地よい。

ワシントンDCのジョージタウン大学の学生街の本屋で、初めてこういう本屋さんを見た時は何だか不思議な気がした。学生達が思い思いにコーヒーやサンドイッチを頬張りながら持参した分厚いテキストを読んでいたり、購入する前の本を読んでいたり。席のない学生は、好きなところに座りこんで床にコーヒーを置いて読んでいる。お金がなくて注文しなくてもコーヒーの良い香りを楽しみながら読書ができる。

2つ目は、南山大学の近くにある「ライブラリー」という漫画喫茶兼インターネットカフェで、もう4半世紀も前から利用している。漫画だけでなく、新聞、雑誌、週刊のビジネス雑誌などは大体ここで読める。

古い木の机と木の椅子が心地よい。医師の国家試験の前には学生が何時間も篭ってそれらしいテキストで勉強している。恐らく名大生だろう。超過分のお金は当然払うが、その分緊張感がある。息抜きをしながら読書や勉強ができるから、長く続けられる。

学生を育てるといった施設ではない本屋や喫茶店で、新刊書の汚れやコンピュータに飲物を溢してしまうリスクを前提で、居心地の良い読書空間を提供しているのだから、大学ももう少し太っ腹に大学の資産である書籍（稀少本などは例外だろうが）の回転率を上げる工夫をしてみてはどうだろうか。

本や雑誌は読まれてナンボだと思う。以前、静岡の大学の改革の際、院生が自分で図書館の鍵を一部開けて24時間使える体制にした。するとやはり本の紛失が発生したという。その時、改革を手がけた先生の苦し紛れの言い訳が素敵だった。

「使わずに死蔵されている本を書庫に抱えているよりも、紛失してしまって図書館にはなくとも、どこかで院生に使われている方が本の有効性は高い、ずっとマシではないか」と。